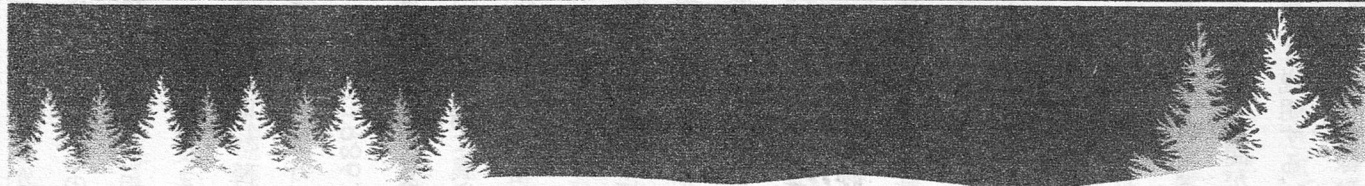


われもこつ 第44号

2023年4月12日発行



C.W. ニコルと私

大槻 幸一郎

ニコルは会合などで私を他の人に紹介する時は、「愛しき天敵の大槻さん」と何時も話していた。

ニコルが亡くなってから、今年の四月三日で早いもので丸三年になる。コロナ禍で公式のお別れ会も出来ずにいたが、状況も好転したので、四月二十八日には名誉会員の高円宮憲仁親王妃久子様をお迎えして信濃町で追悼セレモニーを行う予定になっている。

目をつぶると、笑顔の赤ら顔で髭面の体格のいいニコルが「大槻さん、アフアの森に良く来てくれましたね。」と流暢な日本語で語りかけてくれた日々をつい昨日の様に思い出す。

今から三十七年も前に、「赤鬼」と言われる彼のあだ名の意味すら解らないまま、林野庁長官から「この新聞記事は一体何だね！すぐ行って彼と話し合って来なさい」と厳命され、信濃町にある黒姫山山麓の国有林伐採現場で彼と対面したのが初めてだ。

(次頁へつづく)



Nic

- 「花は見るもの」 花と緑のマイスター2期生 土井 俣子p.3
記録を付けてみませんか？ — その2 — 目撃記録から観察記録へ 栗岩 竜雄p.4
会員の声・会員の庭p.6
植物染料賦 — 野村紅葉(ノムラモミジ) — たかの きみこp.7

当時、私が勤務していた林野庁は北海道から沖縄まで全国の国有林の森林伐採を巡って沢山の火の手が上がっていた。昼は地方の営林局等からの相談を受け、夜は国会質問の答弁書の準備にと深夜まで働いていた時代だ。そんなストレス一杯の時に、降って湧いたように飛び出したのがニコルからの林野庁長官への伐採抗議書面だった。読売新聞朝刊(1986.2.)の社会面を一面ぶち抜きで「拝啓林野庁長官殿：貴重な国の財産である国有林の伐採現場に異議あり」という記事で、環境派の論客 岡島成行記者の署名入り記事だった。

現場に入ってみると確かに皆伐の現場は、切り株や枝葉が乱雑に山積され、林道の片隅は土砂がむき出しに崩れ、一見すると自然破壊の現場と受け止められても仕方がない様子だった。しかしそこは林業技術者として黙って引くわけにはいかない。「森林の回復力が想像以上に強いのが温暖な日本の環境です。一見、森林が崩壊して下流に洪水でも引き起こしそうですが大丈夫です。つい最近までは皆伐する一区画の面積は二〇ヘクタールも有りましたが、これを五ヘクタール程度まで抑えるようにして、環境に配慮した施業に林野庁は転換したのです。道の崩れは木材を引き出すのですから多少は出ますよ。これも時間が経てば草が生えて安定しますよ」と必死で説明する。しかしニコルは「面積をいくら小さくしても、この様な伐採方

法では森で生きてきた動物の住み家は無くなってしまいますね。この崩れは、ドンドン広がって道が一気に崩れてしまいますよ」と現場でのやりとりはバトルに近いものになっていく。夕刻になり、日帰りするわけにも行かない時間となり、ニコルの勧めでニコル邸近くの宿に宿泊することになった。これからが男と男の真剣勝負、肌触れ合う人間につきあいの始まりだ。

日本ハムやニッカウイスキーのCMでお馴染みの、赤ら顔のいたずらっぽい顔が迫ってくる。「大槻さん、これからはお酒の時間ですよ。貴方との森のお話はもう止めましょう。真剣に現場を見てくれてありがとう。お話は噛み合わなくとも気持ちには解ります。私の気持ちも少しは解ってくれたでしょう?」

北海道余市のニッスブランドの高級ウイスキーが出てきた。度数が高いたでなく、香りがすごいのだ。学生時代によく飲んだ、スーパーニッカやブラックニッカ等は比較の外。加えて彼の飲みっぷりは尋常では無く、ストレートをぐいっと飲み干すと「うーん、いいける! 大槻さん、貴方もどうぞだ。三〇代後半の自分が四〇代半ばのニコルに負けるわけにはいかない。「よし」とばかりに一気飲みが始まった。気持ちはドンドン楽に大きくなる。「大槻さんは歌を歌いますか?」「ええ少しだけね。」「私、ギター弾きますからどうぞ歌って下さい」「いやー、お先にどうぞ。」「のやり取りで始まった二人の歌合戦。ニコルはフォーク調の歌好きが集まってプロのバンドを結成しているらしい。ギターやオカリナ等の楽器を器用に操りながら歌

い続けるニコル。感心して聞いていたが、ムラムラと「俺も負けてはいられない。やってみるか!」とアカペラで歌を披露する覚悟を決めた。テレビ東京「官庁対抗歌合戦」で優勝した際の、布施明の「霧の摩周湖」、中学時代に自分の音痴を母に直された際の指導曲アイ・ジョージの「ガラスのジョニー」、大学受験時代に英語で覚えた007シリーズの「ロシアより愛をこめて」等など終わりの見えない歌合戦が続いた。

そんな一夜を過ごした報告を聞いた林野庁長官も、人間C.W. ニコルに関心を持ち、霞が関で懇談をするなどして林野行政へのアドバイスを率直に貰う関係になった。

自分はその後、平成一〇年七月から長野営林局長に就任し、ニコルが購入した信濃町にある「アファンの森」に通う中で交流を深めて行くこととなる。その後、財団の立ち上げ準備や、設立後の理事に就任しニコルに接する機会が多くなっていく中で、彼の人間性を強く意識するようになっていく。

父を太平洋戦争で日本兵に殺され、泣き虫でいじめっ子にやられてばかりいた幼少期のニコル。強くなろうと森の巨樹に抱きついては自問する日々に、日本からの柔道家に出会う機会がイギリスであった。武道に関心を持ち日本で空手を学ぶ機会が出来た二〇代前半、東京の雑踏の中で多少精神を病む中で友人に連れてこられた飯山郊外のブナ山に感動し、日本の自然の美しさに深く傾倒していく。

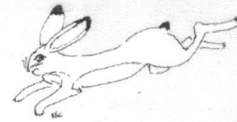
こんな彼の生い立ちを知ると、自分は彼より八年遅れの人生を歩んで来たが、幼き頃は泣き虫で寝小便僧で親を随分と心配させたものの、中学時代にボーイスカウトに入隊した頃から「自我の目覚め」か、異性に加え自然や冒険に関心を持ち、学生時代には柔道部で多少の心得を身につけたお陰で、降りかかる危険をかなり避けて来た自分と良く似た人生を彼に重ねることが出来る。

彼はジビエ料理の達人だ。北極探検の中で原住民からの直伝でもある野生動物の調理方法を身につけた。野生動物の命を頂く敬虔な感謝の心を何時も話しており、信州でもクマやイノシシ、シカの肉を猟師仲間から手に入れた自分なりのレシピを作り上げている。執筆や講演など活動範囲が広いニコルは料理仲間としての著名なシェフ達との付き合いも広い。当然に料理のレパートリーが広がるが、スパイスの効かせ方は独特で、調理の際の彼の真剣な顔つきと、最後の仕上げの際のスパイス加減を操る笑顔が対照的で、その手付きは見事であった。

対して北信・東信・伊那谷・木曾谷の名人から直接の手ほどきを受けて、ニコルを唸らせた大規模の蕎麦がある。ジビエ料理のスパイス、蕎麦の薬味といずれにしても隠し味としてのスパイス、薬味は人生でも大切な役割を演じている気がする。

彼は小説家として数多くの本を出しているが、絵の

才能にも恵まれた。毎年のアフアの森財団からの年賀状・クリスマスカードにはニコルの絵がデザインされている。彼の絵が彼の心情や生き方、自然観、人間性など諸々を表しているような気がしてならない。



These woods, the woods of Afan
Do not belong to me
The wind that blows through
Who owns that?
My spirit may be taken by the wind
But I won't go anywhere
That's it, just so,
It is I who belongs
To the woods of Afan

Cornicol

(クリスマスカードより)

「花は見るもの」

土井 淑子

軽井沢に移り住んで三年目になります。

昨年九月に軽井沢公民館講座「花と緑のマイスター」を修了し、二期生（令和三年十月～令和四年九月）としてマイスターを認定されました。私は「広報軽井沢」で講座の受講生を募集しているのを知って応募しました。既に一期生は町文化財施設などの庭園整備や学習会などで団体活動を行っていました。「花と緑のマイスタークラブ」を立ち上げ、その活動に二期生も合流したのです。

講座の講師の矢澤秀成先生は、町内在住で園芸研究家として多方面で活躍です。その台間を縫

って、私たちをご指導くださっています。講座の前半は花の種蒔き、土づくり、肥料、農薬、挿木など園芸の基本を学びました。後半は実技講習でした。この実技では先生が一人一人、ひとつ、ひとつ、丁寧に教えて下さいました。このような指導はなかなか受けられません。今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

四月の最初の実技「新しい花を咲かせる」では、ペチュニア（サフィニア）の赤（ヒトデ形）と青の花を交配させて種を作りました。五月にその種を蒔き、八月に花が咲きました。紫系の色とりどりの花が沢山咲きました。嬉しさのあまり直ぐに友人たちに配信したところ、「綺麗！」と絶賛されました。

先生がよく言われる言葉があります。先生の恩師からの言葉だそうです。

「花は見るもの」、鑑賞するだけではありません、植物を育て続け、その生涯を看続けることがあなた自身を育てることになるのです。私もこの言葉を大切に、これからのボランティア活動を続けて行くつもりです。

軽井沢町のみなさん!!

町の有形文化財

深山荘（旧スイス公使館）の西側庭園をぜひ見に来て下さい。



こうなると従来のやり方ではカバーし切れなくなるので、今回は一段と専門的な調査票を添付します。昆虫編と植物編がありますが、何にでも応用できるので参考にして頂ければ幸い。前提として多少のキャリアは求められますが、それでも「○○?」「○○sp」との記述は正直に。この調査票が昨年のもとは異なるのは、カテゴリーが限られている場合に用いることで、観察も特定の場所ですり返すことです。あらかじめ生物の状態を示した

КАПИЗМЕ КАПИЗМЕ КАПИЗМЕ

- 4 -

あれから1年経ちました。どのような記録が残せたでしょうか？全てが初記録だった1年目と、これから訪れる2年目とでは決定的な違いがあります。それは比較データを持っていること。前年同期の記録から新しい価値が生まれます。今後はもはや「見ただけ」ではありません。比較・検討できる2巡目に突入です。「見るだけ」の目撃記録は継続しながら、観察記録への移行です。

まず得られる知見は年次変動。「去年は多かったけど今年は少ない。」「去年は遅かったけど今年は早い。」これらがうろ覚えではなく説明できます。そこから踏み込んで、なぜ多い(少ない)のか？なぜ早い(遅い)のか？あらためて理由になりそうなメモを見出せませんか？ 次ぐ収穫は周年経過の把握。各種植物がいつ発芽し、茎を伸ばし、葉を茂らせ、花を咲かせ、実を結ぶのか。昆虫なら卵→幼

虫→蛹→成虫が年一サイクルなのか、複数回の多
化性なのか。これを意識化することでスムーズに
記録が付けられます。

2年目から違ってくるのは比較データの有無だけではありません。具体的に調べたいテーマが絞り込めていたりしませんか？過去の記録票から「？」を消せる日も来るし、名前さえ分かれば用無しではありません。昆虫なら個体差、地域差、性差、季節差などが詳解できますし、外見的差異だけでなく、生態的差異へも意識が向かうでしょう。前号で紹介したヤマキチョウのくだりは好例。そんなシーンとの出会いにも期待しながら、2年目（あるいは3年目以降）も楽しんでみませんか？

この連載は行動範囲が限られる子供向けですが、たとえ狭くても自らのフィールドに立ち、その目で見て、手に触れる実体験こそ、揺るぎない真実。何物にも代え難い宝物。子供の頃にそこを通らないと、人生100年時代と言えど二度と巡って来ない憧憬と言えます。「それより受験で役立つ勉強を…」なんて声も聴こえてきそうですが、誤解を恐れず言えば、勉強なんて大人になっても出来ること。近年、子供でいられる時間が短くなっていると感じます。自然に触れる原体験は、同じ機会を大人になって体験してもイコールではないと思っています。

さて前回冒頭、対象は何でもいい…とお薦めしましたが、それは自然界の間口が広いから。入口は何でもよくて、まずは広く浅くスタート。そのうち興味が絞られて、自ずと方向性が固まるとの考え方からです。初めは「いた、見た…」だけだった記録が、今や「なぜいるのか？なぜそこなのか？」と生態にまで及ぶようになり、引っ張られなくても我が道を行く！そんな心持ちになって頂けているなら、大変喜ばしく思います。私自身は昆虫の中で蝶を専門としてきましたが、間口は狭くも奥行きがあり、気付けば今年は50年目です(1974年の東部小4年時昆虫クラブ入部きっかけ)。奥行きが深

[illegible]

◆庭と向き合う中で

追分の地に家を建てて三十五年が過ぎ、周辺の木々も大きくなりました。この辺りは掘ると石ばかりで、植物を植えるには土を入れ替えなくてはならないような土地、モミ、カラマツ、ニセアカシヤ、アカマツなどが生えていました。出来るだけ自然を残そうと、最少限度木を切り家を建てたのです。

毎年雑草だけは伸び、草刈り機を手を格闘していた頃を思い出します。庭は、植物に詳しい古くから軽井沢に住む友人が関わって、アプローチを決めたり、石積みをしたり、この場所に適した木々を植えていきました。

そのうち、植えていたモミジが大きくなり移植するにあわせ、カラマツ、モミを切りモミジを植えました。その頃から、それまで刈っていた雑草を根から掘り起こして取り除くうちに、いつの間にか苔に変わっていき、今は庭中苔になっています。

苔がきれいだがどうやって植えたのですか？と聞かれるのですが、苔にしたいと思ったわけではなく、自然とそうなったとしか言いようがないのです。

秋になるとモミジの紅葉と苔がとてもきれいです。苔は意外と丈夫で草取りも楽になっています。花も、追分の原っぱに咲いていたワレモコウ、ナデシコ、キキョウ、ユウスゲなどが育っています。

沢山あったフウソウ、トリカブトなどは住宅が増えるにつれて見られなくなってしまうました。

われもこの会に参加し、皆さんから教えて頂いたり、苗を分けて頂いたり庭の野草も増え、次々咲くのを見て楽しんでいます。

これからも、軽井沢ならではの木々や草花にこだわった庭にしていきたいと思いつつ、日々庭をうろうろ歩き回りながら向き合っています。

S.O.



◆野生動物との出会いの場

我が家に過去現在、現れたいろいろな動物を書き出した。

カラ類の野鳥(シジュウカラ、ゴジュウカラ、ヤマガラ、コガラ)、ヒワ、キジ、ヤマドリ、ヒヨドリなど。最近餌を用意しなくなったので訪問は減った。カラ用の巣箱で毎年産卵子育て巣立ちを楽しんで観察している。

ムササビ ムササビ用巣箱を設置したら居ついて、チョココンと顔を出していた。

サル 近年捕獲のせいか数が減り単独か数匹で来るが、20年くらい前は50匹くらい集団が隣宅の庭からうちの屋根を経て、隣に移動して行った。その時のダダダダという響きは嫌な記憶である。当方は驚かせ用 BB 弾を手追い払っていたが、敵もサルもの、女子と見ると屋根からこちらを威嚇してきた。男女を骨格で判別するのであろうか。台所の窓を開けて網戸にしていた時に、一匹のサルが網を手で破って侵入を図ろうとしたのに気づき、激しく足踏みと大声で追い払った。その時、破れてできた3cmほどの穴を糸と針で繕って今日に至っている。それ以来その窓は開けてない。

クマ 過去横切ったのを見た。ウワミズザクラの幹にクマの爪痕とおぼしき物があった。

イノシシ 去年6月、庭でミミズを漁っているらしいイノシシを窓越に見つけ、動画に撮り町の生活環境課に知らせて見せた。住宅が増えて檻で捕獲が難しくなっているとの事であった。イノシシは元来穏やかであり怖がるな・・と言われても遭遇したくない。

リス 歓迎！

カモシカ 一度庭に来た。

野生動物と共存していると実感する日々である。

Y.E.

野村紅葉（ノムラモミジ）

たかの きみこ

事の始まりはある小学五、六年生のクラスでの草木染めの講習です。

子供たちが用意した染材の一つに野村紅葉の葉がありました。聞くと風越公園の街路樹だそうです。

植物染めの「常識」からすると、自然界に赤い花や赤い実は沢山あるけれど染料として使えるものはごく限られていて、ほとんどは一時的に赤く染まったように見えてもすぐに褪色してしまいきます。担当の先生や子供たちには事前にその事は伝えましたが、実際に煮出すと綺麗な赤い液になり、布を浸すとピンク色に染まるので、これで染めたいという気持ちを捨てる事はできなかったようです。何事も体験という事でいくつか用意した染材の一つとして試染することにしました。

被染物は綿ガーゼ。これも植物染めの「常識」から言うとう植物性繊維は染まりにくいので出来れば絹かウールを用意して欲しいという私の要望は手に入りにくいと言う理由であっさりとスルーされたのでした。試染は、明礬、鉄、銅媒染と無媒染で行いました。

無媒染と明礬はほぼ予想通りのピンク。案外しっかり染め着いて水洗いして乾燥しても直ちに色が抜けるということはないので、子供たちは結構満足の様子でしたが、多分そのうちに褪色してしまいうでしょう。

鉄では、綺麗なグレーになりました。

銅は、驚きの緑。赤よりも更に植物染料では染まらないというのが「常識」の緑色が結構鮮やかに発色したのです。世紀の大発見？瓢箪から駒とはこのことです。

「草木染め」というと単純にそこらの草や木で染めるものと思っている人が多いのですが、古代から美しい色、堅牢な色を求めて人類が長い間掛けて試行錯誤し作り上げてきたものなのです。今日では多くの場合昔の文献や伝承を参考にして染めます。染料として有効な植物が取捨選択され、染め方も工夫がされ、中にはわざわざ栽培されるようになったものもあります。野村紅葉は園芸種で、江戸時代から庭木として植えられるようになったようで、そのため染料として使う発想がなかったのではないかと思います。

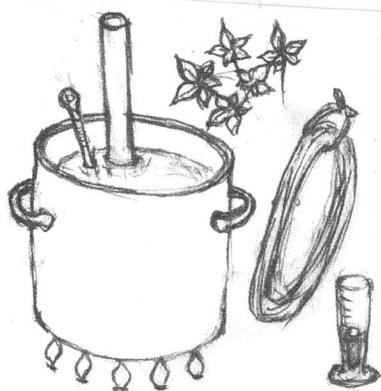
とは言えここまでではかなり短期間で実施したので、私としてはもう少しちゃんと検証してみたいと思い、自分なりに再度試染をすることにしました。

手持ちの真綿紡ぎ系を用い、期待を込めて銅媒染したところ、残念なことに黄味の強い茶色に。鉄媒染では綺麗なグレーになりました。

次にリネンのハンカチと綿ガーゼのハンカチで試してみました。銅媒染で見事緑に。それも常温で！藍に黄色を重ねた緑ほど濃い色ではありませんが、今まで試した「グリーン系」の色とは明らかに一線を画したくつきりとした緑色です。それも植物性繊維に染まるとは驚きです。以前に紫蘇で緑色を染める実験をしたことがありますが、その時染めたのは絹で、一緒に入れた木綿は染まりませんでした。

もっと精査しなければならないことはあると思いますが、私自身は簡単な堅牢度検査をして取り敢えずは実用可能と判断し、リネンのショール用などの染色に使っています。

試しに庭にある山紅葉で同じように染めて見ました。明礬媒染ではほとんど発色せず、銅媒染でしっかりとした黄色になりました。何がどうなっているのか？化学的に分析してくれる人がいるといいのだが、と思います。



2023年の作業日

5 月 14 日 (日)

24 日 (水)

6 月 4 日 (日)

14 日 (水)

25 日 (日)

7 月 5 日 (水)

9 日 (日)

19 日 (水)

30 日 (日)

8 月 23 日 (水)

9 月 10 日 (日)

27 日 (水)

10 月 15 日 (日)

25 日 (水)

11 月 12 日 (日)

空き地に花を！

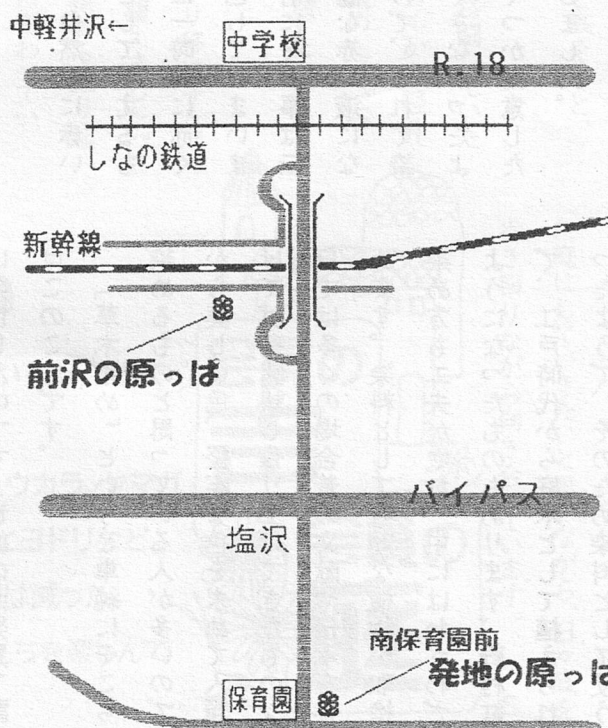


アサマキスゲやオミナエシ、キキョウ、ワレモコウ、マツムシソウ・・・かつて軽井沢のいたるところで自生していた野の花を原っぱで増やしています。



▶日曜日は 発地の原っぱ

▶水曜日は 前沢の原っぱ



午後1時30分 集合

作業の進行状況等により移動することもあります

▶雨天中止

小雨の場合、決行することもあります

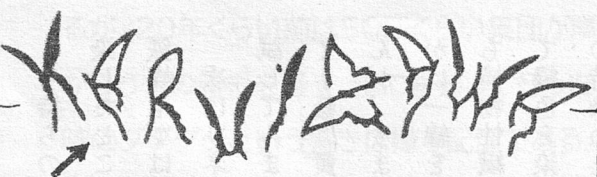
▶持ち物：園芸用手袋、スコップ、草刈り鎌、日除けの帽子、長靴、飲み物（熱中症予防に）

← 都合により変更になることもあります

◆◆◆ 会員募集中！ ◆◆◆

【年会費】1,000 円

ご家族で入会の場合 2 人目から 500 円



くりいわさんの蝶文字、よめるかな？(ヒント:アルファベット)

* * * * *

本号 4~5p の栗岩さんと 画家石川功一氏の
コラボ展 軽井沢の花と蝶展

2023 4/22 ① ~ 2023 11/19 ②

小さな美術館 軽井沢草花館 で開催されます

詳細は草花館のホームページをご覧ください

<https://kusabana.net/>

第 11 回ちいき活動みほん市のおしらせ

期日：令和5年6月18日(日)午後 1 時 30 分～3 時 30 分

会場：軽井沢町中央公民館 大講堂他

主催：第11回ちいき活動みほん市実行委員会

共催：軽井沢町社会福祉協議会

われもこうの会も出店します。山野草で庭づくりしたい方、お立ち寄りください。苗や種をご用意してます！